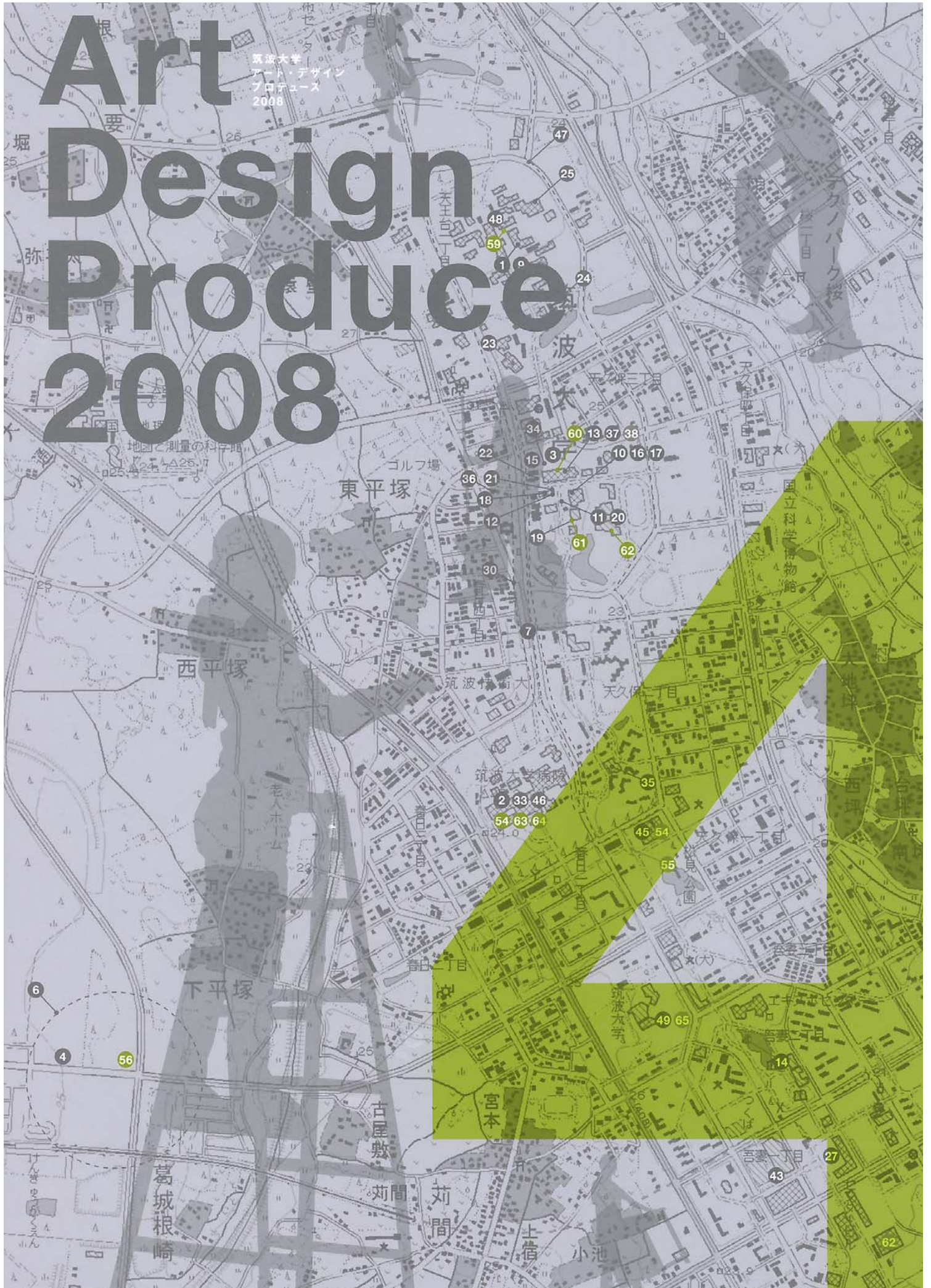


# Art Design Produce 2008

東京大学  
アート・デザイン  
プロデュース  
2008



# 炭鉱遺産でまちづくり

吉岡宏高 (札幌国際大学准教授)

コーディネーター…鈴木雅和 (筑波大学教授)

2007年12月17日

## 故郷の街を再生する

鈴木——私は今年の5月に造園学会のシンポジウムで吉岡先生にはじめてお会いしました。そのシンポジウムでお話されていた炭鉱遺産の話題をぜひとも筑波大学の学生にも聞かせたいと思い、本日お越しいただきました。

吉岡——札幌国際大学観光学部で吉岡です。石炭というのはみなさんの日常生活ではほとんど聞かないワードだと思います。日本の経済成長を進めるうえで欠くことのできなかった石炭産業がわずか40年くらいの間に急激に没落し、それに伴って地域も変わってしまいました。今日はその変わり果てた地域をどうやって再生していくかということについてお話をします。

私は北海道三笠市にあった、北炭幌内炭鉱という炭鉱の出身です。私が高校生のとき、この地域はまだ最盛期の面影をはっきり残していましたが、そのときと今の同じ場所の風景を比較するとまったく違うものになっています [fig1, 2]。まるで森に飲み込まれてしまうようなことが顕著に起こった場所が炭鉱跡地です。

石炭は、地中から岩石とともに掘り出され、それを選炭して出荷します。1tの石炭を得るのに1tの岩石がゴミとして発生します。この岩石を積み上げてできた山をズリ山 (ボタ山) と言います [fig3]。高さが150-200mになる人工の山です。

一つひとつの商品、例えばペットボトル入りの水について、水だけでなく容器の原料や輸送に使われたエネルギーについても考えると、ペットボトルという商品は簡単に手に持てる程度の重さの商品ではなくなるはずですが、この考え方を「エコリュック」といいますが、私たちは直接私たちの目に見えるようにならない限り、なかなか環境問題としてとらえることができません。その点でこのズリ山はとても象徴的かつわかりやすい対象だと思います。炭鉱がなくなった今も、炭鉱はこのような点で今日的な意味を表現できます。

私は現在、出身地である炭鉱地帯の地域再生に3つの立場から関わっています。そのひとつは市民側での活動で、NPO法人炭鉱の記憶推進事業団を作り、理事長として活動



fig.1 炭鉱施設の過去



fig.2 炭鉱施設の今



fig.3 北海道のズリ山

しています。もうひとつは行政側での活動で、空知地域活性化戦略会議の委員長として関わっています。この地域は炭鉱がなくなる過程で国が支援策としてたくさん公共事業を行ってきました。国に頼めばお金がもらえるものですから、行政は補助金中毒を起こしたようになってしまいました。こうして破綻した例が夕張市ですが、このように国の支援に依存しきった政策から地域活性化の政策に行政の方針を変えていかない限り、市民が頑張っても地域再生の流れは変えられません。そこで行政の関係者を説得して地域再生の流れに加わってもらっています。最後の立場は教育からのアプローチで、学生に参加を呼びかけています。ここには学生を変えるものがあると思っており、実際に参加した学生は、帰る頃には地域再生という問題への姿勢が変わっています。過去には、地域再生に興味を持ったために、企業に内定していたにもかかわらず就職を取りやめて大学院進学を選んだ学生や、大手企業を退職してコミュニティ・ビジネスを始めた人などがいます。

今の時代に欠けているものは各専門家をまとめて方向づけてゆく人材だと思います。私は市民、行政、教育を結ぶ立場にいます。総合的にものを見たり、情報を集約・媒介したり、調整を行なうことを活動の中心にしています。

この地域で石炭が発掘されたのは1879年のことです。明治政府の直営で幌内炭鉱を開き、石炭運搬のための鉄道を敷き、その沿線でレンガを作り、港を整備しました。石炭を中心に北海道開拓のプロジェクトが進められました。その後、炭鉱や鉄道は国から民間企業に払い下げられた、とくに鉄道が国有化され輸送の独占が崩れた後は三井などの財閥系も参入してきました。こうして第2次世界大戦前に一大産炭地になったのです。

出炭量のピークは1960年で、以後急速に衰退していき、幌内炭鉱は1989年に閉山を迎えました。私は1963年生まれなので、ちょうど生まれたときから炭鉱の衰退が始まり、街が壊れていく姿を見て育ちました。このことが私がまちづくりに関わるようになった理由でもあります。

この地域の特徴は1990年代まで石炭の生産が行なわれていたことです。つまり石炭生産の記憶が、暮らしていた人や実際に働いていた人の証言として入手できる状態にあるのです。

## 炭鉱の風景



fig.4 坑内から上がってきた炭鉱労働者

私の父が働いていた炭鉱は日本で一番深い地下1,250mの場所にありました。地下1,000mまでは2分半かけてエレベーターで降りていきます。こうしたエレベーターにはもちろん壁なんてものはありませんし、帽子に付けたランプだけで潜りました。このような場所で1日8時間働いていたのです〔fig.4〕。採炭には西ドイツ製の機械を使っていて、1日に5,000tの石炭がこの炭鉱で生産されていました。こうした産業が第2次世界大戦敗戦後も日本の経済復興を支えていたのです。

しかし、エネルギーが石炭から石油に転換してゆくのに合わせて、石炭生産は1960年をピークに衰退がはじまりました。空知地域の人口をみると、40年の間に、都市農村部の人口はそれほど減っていませんが、炭鉱地域では1/5にまで減少しました。これだけ急激に人口の減った地域はほかになく、今では明治時代と同程度の人口に戻ってしまっています。

私はこの繁栄と衰退は2、30年後の日本を表わしていると思っています。空知地域では4割が高齢者（65歳以上）であり、日本で最も高齢者率が高い地域です。しかし30年後には日本全体で高齢者率が4割近くになりますから、この地域はそのときの日本状況を示

しているといえるのです。

石炭産業が盛んだった当時の栄華を示す遺産はあちこちにありますが、現在の地域の人はそれらを「ゴミ」だ、「汚い」と言います。一般に炭鉱は暗いというイメージがありますが、そのようなイメージがついたのはマスコミの影響だと思います。マスコミが炭鉱に来るのは事故や閉山の時だけで、人々が泣き叫んでいたりする映像しか撮られなかったからです。そのために閉山後の地域の合言葉は「暗いイメージを払拭する」となり、短絡的な考えのもとに地域の歴史とは関係のないアルプス地方をまねたチロル風の市営住宅やロボット科学館といった施設を建て、そして夕張市のように大きな失敗をしていったのです。

## 誇りの回復

このような状況では、まず誇りの回復が急務だと考えています。ここ20年だけみても、この地域の行政による支出が全体で1兆円を超えているのに、効果が顕われないのは、自分たちの足もとにある蓄積を顧みず、とりあえずよさそうな目の前のものに手を出し続けてきたからです。誇りの源泉は自分たち自身がやってきたことの中にしかないのです。地下1,000mで働いていたことを誇りとするか、恥とするかは自身の問題です。ではどうやってこの誇りを実感するかですが、それは人に自慢することが一番です。しかし自慢を身内や仲間に話しても効果はないですから、耳を傾けてくれる「外の人」が必要になってきます。

次は誇りを生活の糧にしなければなりません。今まで補助金に頼ってきたのですから自分たちではうまくアイデアが出てこない。しかし現在、夕張市の財政破綻などによって炭鉱都市の存在について全国的に「外の人」からの注目が高まっている。このことをチャンスに変え、空知も忘れられてしまわないようにアピールをしています。

この10年で、日本全国の「外の人」やときには海外から観光に来ていただき、空知の炭鉱遺産を評価していただきました〔fig5〕。また炭鉱を知らないみなさんくらいの年齢の方々がさまざまな観点からこの観光を取り上げてくれました。

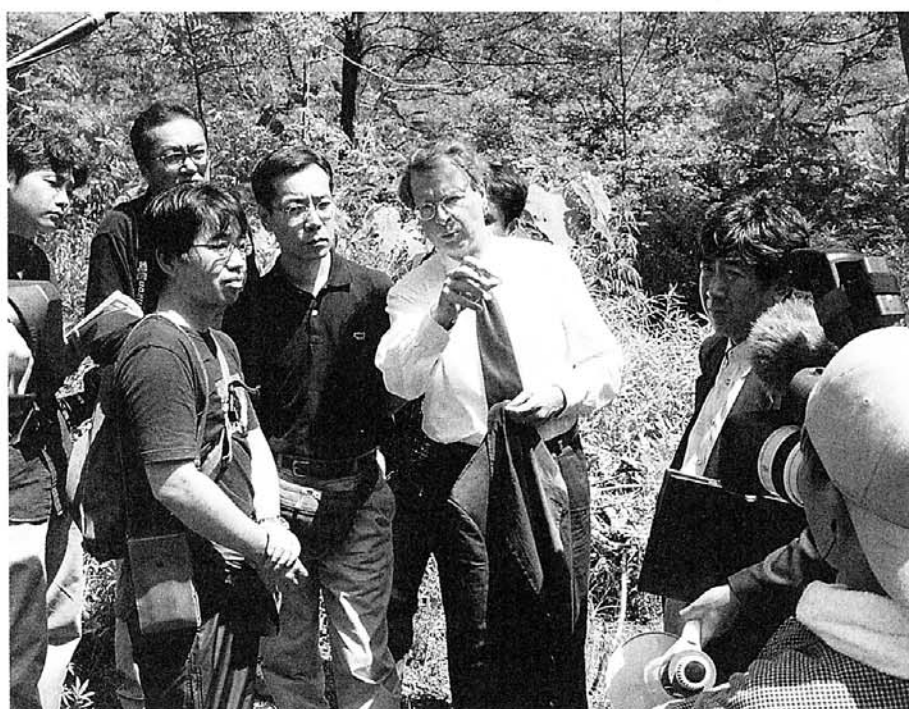


fig.5 海外との交流、ドイツから来たブロックハウス博士

誇りと外からの注目は「鶏と卵の関係」になっています。外部からの注目があるから誇りが持てる、また誇りを持っているから外部から注目される。どちらに先に着手するかが課題になるのですが、私たちの場合は、炭鉱遺産を利用してまず外からの注目を呼び、それで地域の方々に誇りを取り戻してもらう。そして外の人たちに空知をアピールしてもらうようにしています。

空知地区の経済に活気を与える源となる「地域の誇り」の回復（地域力）、炭鉱遺産をまちづくりに取り込んだプロセスを示し「外の注目」を受けること（創造都市）、この両者の調整を行ない、地域マネジメントを務める「仲人」（地域マネジメント）。この3つのキーワードを地域全体の取り組みとして掲げ、3つの掛け合いで発展を目指していきます。かつては決まった最終形に向けてまちづくりを着々と進めていきましたが、今はこうした方向性とポイントだけを押しえてその時々で方向性に合致した選択肢を選び、さらにチャンスを広げていくことが、地区が持続的に発展するまちづくりの手法だと考えています。

### 海外のまちづくり例——ドイツ・ルール

先進的な取り組みの事例をご紹介します。ドイツのルール地域は空知と状況が似ており、重厚長大産業が衰退し失業者が増えてしまいました。それがここ10年間で誇りを回復し、ドイツで一番住みたくない場所から2010年の欧州文化首都に選ばれるまでになったのです。取り組みの例を挙げると、デュイスブルクでは製鉄所跡の高炉をそのまま残して250haの公園に作り変えました〔fig.6〕。鉄鉱石を運んだ滑車を利用してロープクライミングをやったり〔fig.7〕、夜にはライトアップされたりもします。そして横の変電所はカフェに改装されていて、ライトアップを楽しみながらワインやビールを飲むことができます。もともと工業施設は生産のための機能を追求してできたものですが、機能的なものは機能美を持っているので、それを芸術品として観賞する楽しみ、今ブームになっているテクノスケープというものです。



fig.6 製鉄所跡の公園

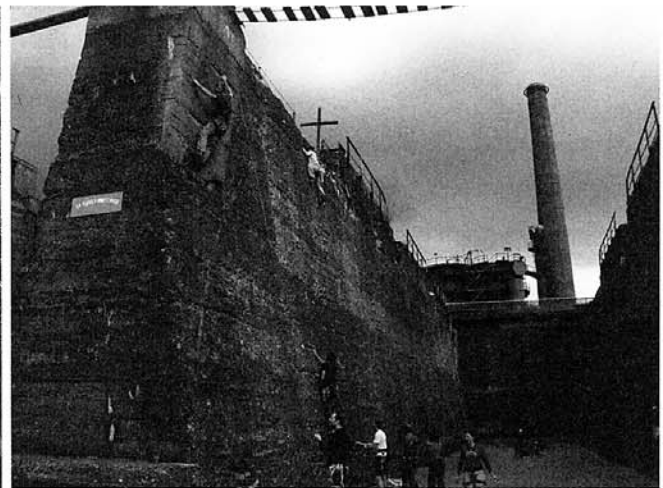


fig.7 ロープクライミング

エッセンにある世界遺産ツォルフェライン炭鉱〔fig.8〕には、インダストリアルデザインのミュージアムがあります。ボイラーをそのまま残してミュージアムに作り変え、ボイラーの昔ながらの配管などと一緒にバスタブやバス停のマークなどが置いてある、とてもおもしろい場所になっています。



fig.8 世界遺産ツォルフェライン

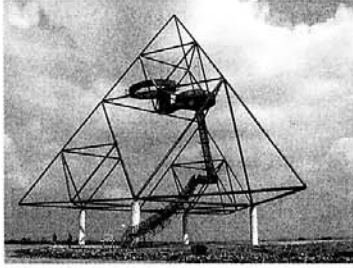


fig.9 テトラエーダー

ランドスケープの例では、スラム街の開発と周囲のズリ山の景観を融合させたプロジェクトがあります。ドイツも日本と同じく縦割り行政なので、建築とランドスケープの開発はばらばらに行なわれますが、このプロジェクトは国際コンペを行ない、住宅街の軸線から通りがまっすぐズリ山に伸びていく計画案を採用しました。夜にはズリ山からサーチライトが照射され、ランドマークにもなっています。こうした計画によってスラム街が一番人気のある街並みに変わったのです。

ポットロップでは、高さ60mの巨大な三角錐の建造物テトラエーダーをランドマークとして作りました。45m地点に展望台があって、有名ではなかった小さな工業都市は一躍有名になり、街の顔となっています [fig.9]。

製鉄所にあったガスタンクはいまでは芸術空間になっています。直径40m、高さ100mというインダストリアルスケールの、芸術作品の展示場として新しい役割を担っています。

人々はこのような産業遺構を巡り歩き楽しんでいきます。こうした海外の例を空知にそのまま導入できるかと問われれば、人口や文化が違うので簡単にはできないと思います。しかし、いずれも新しい価値を取り込んでいく姿勢はとても参考になり、象徴的なすばらしい例だと思います。

### 埋もれた炭鉱遺産を歩く——価値の発見

このようなうらやましいドイツの動きを片目に捉えながら、2001年から幌内でさまざまな活動を展開しています。炭鉱閉山後、ここでは炭鉱の負のイメージを払拭し脱炭鉱に向けたまちづくりをしてきたのですが、うまくいきませんでした。幌内には、冒頭に紹介したような巨大な人工のズリ山が残っていたり、当時の姿のままの金物屋さんが営業していたりと貴重なものが残っています。外部の人にこれらを紹介すると興味を持ってくれるのですが、逆に内部の方々には古くて恥ずかしく価値はないと言います。

こうした遺産をどうするか。最初は主要なエリアの1.5km四方をとにかく歩きました。スタート当初の2002年は、「炭鉱土木を巡る」「山奥の布引立坑探検」など、月ごとで異なるテーマ設定をして、5月から10月の半年間で計6回歩きました。地元の人から言わせれば「こんな廃墟しかない所は1回歩くだけで十分」なのですが、6回すべてに参加してもらった人からは「こんなにいろいろな場所があるんだね」と言ってもらえるくらい本当に多くのテーマ設定ができました。また参加メンバーも炭鉱関係者ばかりと思っていたのですが、結構若い人たちも参加してくれました。

この「歩こう会」を通じてワークショップを行ない、次の段階へステップアップしようということになりました。先ほど紹介したルール工業地帯の再生プロジェクトに関わっていたブロックハウス博士と知り合いになったので、私たちの活動を視察してもらおうと企画しました。ドイツ人の博士が来てこの場所を評価してくれれば、このインパクトを次のステップにつなげられると考えたのです。

せっかく来てもらうのですから、伸び放題の雑草で覆われた道を歩けるように整備することにしました。ほかには廃墟化した旧変電所を整備したりもしました。約100名の人と一緒に現地を歩いたブロックハウス博士からは、炭鉱施設跡地の公園化、元炭鉱マンなどを語り部としたガイドツアーや変電所、神社などの保全や幌内線跡の活用などについて具体的な提言をいただきました。これを契機に、ルールのランドシャフトパーク（景観公園）を意識して、この炭鉱の廃墟を「幌内炭鉱景観公園」と名付け、市民による具体的な公園づくりがスタートしました。公園と言い切り具体的な場をつくることによって、内部

の人にも炭鉱跡地がさまざまな可能性を持っていることを多少は理解してもらうことができ、活動に参加してくれた地域外のランドスケープの専門家たちはベースとなるプランを考えてくれました。

## 市民による整備

公園ですから敷地を巡るための園路が必要となりますが、市民側には木材を買うお金がありません。ですが、炭鉱で働いていた人たちは一度入坑してしまえば終業まで出坑できず、限られた作業環境の中で工夫して石炭を掘っていましたので、材料がなくてもどこかで解体した建物の木材を持ってきたり、そばに生えている木を切ったりして階段や橋を作ってしまう。このように市民の力を使って整備を進めています。

また学生がボランティアに来ると地元の人との会話が必ず生まれます [fig.10]。彼らは80歳を超えたお年寄りに作業を教わったりするのですが、なかには滑舌が悪いうえ、専門用語をたくさん使うので何を話しているのか理解できない学生もできます。でもそういうお年寄りも人気がある。「何を言っているのかわからないけどすごい」とある学生は言っていました。それはこの人がここで生まれ、育ち、炭鉱で働いてきた50数年にも及ぶさまざまな労働の蓄積が体の外に溢れ出てきているからだだと思います。それが同じ空間で働くことによって伝わってくる。これは場所の持つ力だと思います。それを伝えるきっかけとして公園整備などの作業があるのです。



fig.10 公園の園路整備を通じた世代間交流

こうして人の手が入ると空間は変わってきます。神社の鳥居が草むらに沈んでしまった所があるのですが、人の手が入るだけでまったく違った場所になりました。このように人の手が入ると、いい素材や空間は浮かび上がってくるのです。

## 蛍のように光るまちづくりを目指して

ルール地域と比べると空知地域の人口規模は10分の1以下ですし、経済は疲弊し、さ

らに高齢化も進んでいます。そんななかで地域再生にどう取り組んでいくか。個々の市町村が個別に取り組んでいてはとても成果を出すのは無理です。そこで蛍の群れが輝くように、あるときはあの町、またあるときはこの町というふうに空知地域全体で輝いていこうじゃないかということを考え、現在取り組んでいるところです。

そのために2005年には空知地域でかつて炭鉱があった8自治体から首長を集めてサミットを開きました。そこに再びドイツからブロックハウス博士にも来ていただき、首長の周りを聴衆で取り囲んで「やるぞ」という気に満ちた状況に持っていきました。

会議では、拠点的な場所を「選択と集中」して取り組み、それらを「ネットワーク化」することが合意されました。ではそういう拠点はどのような場所でしょうか。従来は文化財保護的な発想に基づき、過去に頑張ったものを未来に引き継いでいこうとするものでした。けれどもこれだけでは、多くの人に訴えかけることができません。未来に必要なものを過去のなかから探すという、これまでと逆の発想も取り入れる必要があります。これには具体的に形のある場所だけでなく、炭鉱労働で培われた生き方などを受け継ぐことができる場所、という意味も含まれます。例えばそれは、今日をひたむきに生きるという姿勢です。こういう生き方のなかに若い皆さんが見習うべきことはたくさんあると思うのです。こうした記憶を受け継ぐために若者と地域の人が変わる場が必要だと考えています。芸術学群のみなさんが学んでいるアートは今あるものに違う価値観を付け加える行為ですから、過去と未来をつなぐ方法として期待できるのではないかと考えています。現在にある場を外の人と地域の人との交流が生まれるようにしつらえて、過去の誇りと未来の発展を結びつけていく。ピックアップする拠点はこのような場所です。あとは、具体的に事柄を進めていく際の、テーマをどうするかということです。こういった全体の動きのなかで幌内のプロジェクトが進められています。そこでまず必要なのは、誇りを持って未来に向かっていくということです。地域の外と中の人が変わるなかから、新たな活力が生まれてきます。その象徴であり最大の手段が炭鉱遺産です。

われわれは「過去を忘れて未来はない」というメッセージを発しています。その有力な実現手段が、皆さんが専攻したり関心を寄せているアートやデザインといった分野だと思っています。ぜひ北海道を訪れる機会がありましたら、炭鉱遺産を訪ねてみてください。今日はありがとうございました。



平成17年度文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」採択  
アート・デザイン教育による3C力の育成  
——大学を開き地域を活かすプロセス参加型実践教育プログラム

事業推進責任者 西川 潔(筑波大学芸術専門学群長)  
事業担当者 貝島桃代(筑波大学講師)  
オーガナイザー 渡 和由(筑波大学准教授)  
事業推進室 筑波大学アート・デザイン3C力教育室  
三友奈々(筑波大学準研究員)

### Art Design Produce 2008

筑波大学アート・デザインプロデュース2008

発行日 2009年3月  
編集 渡 和由、貝島桃代、三友奈々、  
土岐文乃(編集)、高岡明日香(編集補助)  
編集協力 飯尾次郎(メディア・デザイン研究所)  
ブックデザイン 三木俊一、根岸良介(文京図案室)  
発行 筑波大学芸術専門学群 〒305-0006 つくば市天王台1-1-1  
tel. + fax 029-853-6380